

案山子の恋歌—後書

演歌の花やかなりし頃、どこのテレビ局も週に1回は歌謡曲の時間があった。最近では復活の兆しもあるが、当時は毎日どこかの曲で歌番組なるものがあった。しかしそのスタイルはどこの局もほとんど変わらなかった。1時間の番組の中で、番組タイトルとCMと、それにエンディングを除き、視聴者を飽きさせないために、一人の歌手の持時間は、おおよそ3分と決まっていた。これが『歌は3分間のドラマ』と言われるゆえんでもあるのだが、テレビ番組からカラオケボックスへと、歌の世界が変化してゆくプロセスの中で、視聴者は聴く側から歌う側へと変身を遂げて行った。いわばマスメディアを視聴する側から、むしろ自己表出の場へとその活動拠点を変えて行ったのである。こうなると3分間という枠は、自ずからなくなってくる。実は演歌の世界では歌詞は9割がた3コーラスと決まっている。これも3分間の枠のためだったわけだが、この枠の中で起・承・転・結を完結させようとしていたのである。ところがこの枠が外れてみると、4コーラスのいわばドラマ仕立ての歌も可能になってくるわけで、このことはカラオケの背景として流れる映像部分との整合性もよくなり、今後の一つの方向性を示すものと思われるものだった。

そしてもう一つ同じ理由で、1コーラスに占める文字数の制限もなくなってくる。たとえば『銀座の恋の物語』を例にとると、1コーラスで96音から成り立ち、3コーラスで288音となる。一方1983年、彗星のように現れた尾崎豊の詩は、短いもので例えば『I LOVE YOU』が358音、長いものになると例えば『17歳の地図』で766音で倍以上になっている。情報化時代に育った若者の心の動きや感情の起伏を、たかだか100音程度の定型詩で表現すること事態、もともと無理があるような気がする。つまりその分、内容が薄くなってしまう。

また定型詩の場合、どうしても文字数を整えるための言葉も入り込んでくるので、ストーリー性を表現するには自由詩よりも1～2割程度文字数が多くなる傾向にある。しかもデジタル時代に育った若者に、言外の意味だの行間の余韻などといったところで、これは所詮無理な注文である。それよりも映像優先の今日、いかにビジュアル化するか、の方が優先課題だろう。このことで生まれて来る不合理があるなら、それは作曲家が背負わなければならなくなってくる。とんでもない時代になったものだ。

かつて小室哲也が志向したダンスミュージックの爆発的人気の裏には、こうした人々の欲求の様なもの、つまり単に音楽という枠にとらわれずに、もっと人間の五感を刺激する視覚的なものが求められており、その欲求を見事に捕らえたからと見ることもできよう。以上のような理由もあって、ここでは4コーラスを基本とし、1コーラス100～120音という形を設定し、できるだけ誰でもが理解できるストーリー性に重点をおくように努めた。小生のこうした企画意図を読者諸兄に少しでもご理解いただければ光栄である。

そして最後にマルチチャンネル時代を背景にして、世界中でソフトの不足が顕在化してきている。新しいソフト開発の動きは活発ではあるが、とりわけ映像ソフトは巨額の資金を必要とするため、まだまだソフト不足の時代は続くものと予想される。マイクロソフト社が、さっさとwindowsXPに見切りをつけて、7や10に力点を傾けているのも、こうした、将来を見据えてのことなのだろう。将来は素人の映像作家が輩出することを念頭においているようにも見える。こうした世の中の動きの中で、小生のこの『恋歌』も多少ともソフト開発の一助になればと思いつつ、敢えてこの作詞にチャレンジした次第である。もしも『案山子の恋歌』を元に、小生と同様の考えの下、メロディをつけてくださる方がいらっしゃるならば、大いに結構。当座は無断でかまいません。

メールアドレス : takeru07@ab.auone-net.jp

